

宇敷潤奈

## アクション映画における女性表象の日米比較

### 要旨

本研究は2000年代から2020年代の日米それぞれの女性アクション映画を取り上げ、主人公の設定と背景、身体表象、物語の構造という3つの分析軸によって作品を分析し、比較を通して、女性アクションヒーローのイメージやキャラクターの描かれ方の差異を明確にするものである。

日本作品では、身近な存在の女性が非日常的な戦いに巻き込まれる展開が顕著であった。また学生服姿によるアクションシーンが比較的多く、男性の視線を意識し、性目的化された戦う身体を提示していた。成長物語・人間関係の再構築などといった、「小さな物語」が多いこともわかった。

米国作品では、主人公が始めから職業として戦う女性として描かれる傾向が強い。また戦う女性の性目的化の回避が顕著である。そして世界の救済や倫理的選択などといったメッセージを内包した「大きな物語」が描かれ、女性ヒーローが世界の運命や歴史に関わる存在として描かれる傾向にある。

この結果から、日米それぞれの観客が求めるキャラクター性や物語構造が大きく違うため、戦う女性の描かれ方も大きな差異が生じるということがわかった。この要因はフェミニズムに対する意識の強さや女性ヒーローの影響力、市場の大きさなどの違いが考えられる。この差異は、単なる文化の違いではなく、長い歴史の中で育ってきた物語的土壌の違いであることも読み取れることがわかった。